
jumble+rumble!

一月宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

jumble+rumble!

【Nコード】

N9711R

【作者名】

一月宮

【あらすじ】

幻想水滸伝シリーズ中のキャラクターたちが、あんなことこんなことしてたら楽しいのになあという妄想から生まれたおはなしです。ストーリー無視、中途半端コメディ。『幻想水滸伝もの書きさん同盟』に投稿していたものの再録です。

vol・幻水2外伝「それってやっぱり奴らの仕業」(幻想水滸外伝)

——この顔にピンときたら——

なんていう貼り紙を、たまーに見かけはしないだろうか。

そう、それぞれ。たぶん今あんたが想像してるような、警察や西部劇なんかでデカデカとWANTED!なんて書いてあるやつだ。

その人相書きバージョンを思い浮かべてくれればいい。

「…なんで、おれが指名手配されなきゃならないんだよ」

本人の方が色男だつて、とひとりごちながら、ナツシュは自分の名が刻まれた貼り紙をまじまじと眺めている。

無事グリーンヒル脱出を果たし、更なる調査を続けるため南下。それはデュナン湖を逆時計回りに辿った先の、ラダトにて起こった出来事だった。

ナツシュはそいつを宿屋の前で見つけたが、辺りの店先や塀に、同じものがベタベタ貼ってあることに気づく。
犯人は誰かって、そりゃあ……。

「ハイランドの紅白コンビめ……！卑怯な手を使いやがって」

こいつに卑怯と言われちゃ、全世界の人間みんな卑怯だよ。

手配書へ丁寧に落款されていれば、このすつとぼけ野郎でも察しがつくつてもんだ。

負けた腹いせか、はたまた国の脅威と考えたか詳細は謎だが、にしてもこの下手くそさといったらない。

なるほど特徴はよく掴んでいるようだが、その前にこんな目玉を持った人間は存在しない。

一体どっちが描いたんだ？

「両方とも、絵心があるようには見えないからな」

は、は、は、と口元を引きつらせていると。

「あッ指名てはいの男だーーーー！」

「つかまえるー……！」

缶蹴りに理性を忘れていた湊垂れ小僧どもが、突然ナツシュを発見するや否や、我先にと襲いかかってきたではないか。
これにはさすがに驚いたナツシュ。

大人たちが声に気づくのを恐れ、目にも留まらぬ速さで街の入口ま

で走り抜けた。さすが未来の天速星。

「おれって実は、こんな顔なのか……？」

サウスウィンドウへ引き返すことになった道中、すっかり持つてきてしまった手配書を広げる。

さっきの小僧に、一発でバレたのが相当ショックらしい。小さい奴。

「つーか、どっちが描いたんだよ。変なサインは入ってるし………
下手くそな字」

そりゃお天道様だけのヒミツってことだ。

辛気臭い顔するなよ。

そんなに気になるなら、ハイランド宛に紅白まんじゅうでも送りつけてやりな。

+++

Vol. 1・幻水3「イケてるロミジュリ講座」（幻想水滸伝3）

満月輝く夜半の水辺に、いっとう煌めく灯りがひとつ。

ビュッデヒュッケ城酒場にある演劇舞台。その裏では、一週間後に迫った公演に向けて、なおも練習が繰り返されていました。

「…スタート！」

バシッと落とされた照明。

するとぼんやり、女性の姿が浮かび上がります。

「ヒューゴ…じゃなくて、ロミオさま。どうしてあなたはロミオさまなのでしょう。その麗しき家名を惜しみなくお捨てになつてくだされば、あたしも家名を捨てますのに！ ああ、ロミオさま………」

哀愁たつぷりにヒロインを演じるのは、今舞台が初主演となるベルさん。

ヒラヒラフリフリの衣装を纏い、愛しの恋人の名を告げます。

ただ、少し演技が過剰な気もするのですが。どうなのでしょう。

そして暗がりから近づいてくるのは――

「そ、その言葉確かにちょうだいします。た……ただ一度、おれを」
「ストーリーップ!!!」

突然悲鳴にも似た声が耳を突き刺すと、舞台裏の大照明がパツと光を点しました。

声の主はご存知、劇場支配人兼監督のナディールさんです。

丸めた台本を机に叩きつけ、ヒューゴくんを睨みます。ああ、仮面をつけているので、憶測ですが。

とにかく、気合たっぷりなのは事実です。すごいですね〜

「アナタは黙らっしゃい」

はい。すみません。

「いいですか、ヒューゴ氏」

ナディールさんは台本をヒューゴくんに突きつけます。

「アナタには決定的な何かが欠けている。……………そう、覚悟です。
ロミオという重要な役どころを演じるという覚悟が、アナタには感じられない!」

そしてガタンと椅子から立ち上がったかと思うと、一回転して両手で仮面を覆い、天を仰ぎました。

「いいですかヒューゴ氏!」

「は、はい？」

今度はムーンウォークで詰め寄ります。

「演技に恥じらいなどナッシング！ そう……アナタは今から、仮面を被るのです。ヒューゴという今までの自分を捨て、ロミオになりきって御覧なさい！」

肩を掴まれたヒューゴくんは、なす術なく頷くしかありません。でも視線が宙をさまよっているところを見ると、どうやら理解していないようです。

「そろりでやめときなよ」

艶やかな女性の声が響いたと思ったら、衛兵役のクイーンさんがやってきました。

今回の配役を決めたのは炎の英雄ゲドと称していますが、実はすべてクイーンさんが選出していたのです。（あのゲドさんが、自ら台本を読むわけがないですものね）

「ヒューゴだつて今まで頑張ってたんだ。支配人だつて、そこは認めてるだろ？」

「ええ、まあ……」

「それに覚悟覚悟っていうけど、ベルの方は少し空回っちゃいないかい？」

「えッ!？」

いきなり話を振られて、ベルさんはびっくりして目をパチクリさせました。

「だ、だってヒューゴさんといっ……じゃない、せっかくのジュリエットだもん」

難を逃れたベルさんですが、どうやら本音はヒューゴくんと一緒にらどうでもいいみたいです。

クイーンさんもクイーンさんで、ふたりの反応が見たくて選出したクチ。

ベルさんの思ったとおりの態度ににやけが止まりません。

事態がようやく収束を見せようとしたその時です。

今まで黙っていたヒューゴくんが、おどけた調子で言いました。

「クイーンさんの言うことも一理あると思うよ。たかが劇なんだし、そう本格的にやらなくてもいいんじゃないかな」

「たかがですって!？」

もしかしなくても、ナディールさんの逆鱗に触れてしまいました。肩から発する怒りのオーラが何十層にも膨らんで、ヒューゴくんの体を蛇のように羽交い絞めにします。

すると再び、バシッと照明が落ちてしまいます。

ちょうどいいタイミングですね。停電でしょうか。

「なにがちょうどいいんだよ!」

「ヒューゴ氏! アナタちよっと、そこへお座りなさい!」

不適切な表現は謝罪しますが、ヒューゴさんのピンチには変わりありません。

助けを呼ぼうにも肝心のふたりは既にいなくなっていました。

「裏切られた……………！」

一週間後の公演は大喝采のうちに無事終了。なんでも、相当情熱的なロミオとジュリエットだったとか。

めでたしめでたし。

「めでたくない！」

あ、そうそう。

ヒューゴさんはナディールさん恐怖症になったらしいです。一体どんなお説教だったんでしょうね。

+++

本拠地のレストランは今日も大繁盛。

ちょうど書き入れ時とあって、レツオウの包丁捌きもはや芸術と
いつていい速度に達していた。

そんな中、一組の席には異様なメンバーが揃っている。

女王騎士ミアキスに、オベル共和国からの協力者ベルナデット。
どこが異様かというところ。

「俺は断固、チーズケーキを主張する」

元女王騎士ゲオルグが混ざっている光景が、である。

話し合っているのは『レストランのメニューに入れる新しいデザート
について』。

そこで無類の甘い物好き3人が集まったというわけだ。

「ゲオルグ殿は、チーズケーキだけでいいんですか？ 他には？」

「チーズケーキと……あとはプリンだな」

ミアキスの質問に真面目に応えるゲオルグ。

その寡黙そうな表情から次々とスイーツの名が出てくるとは、傍目
からは想像しえない。

「プリン！ いいですね。私は焼きプリンのあの、なんともいえない

い柔らかさが好きなんです……。エストライズの『甘々亭』に置いてある焼きプリンが格別です」

プリンに反応したベルナデットが好感触を示すと、ミアキスは頷きながら傍らのメモに書き記した。

「はいはい、分かります。でも『甘々亭』っていうと自家製こんぺいとうもおいしいんですね」

「やはりミアキス様もそう思いますか？ 入れてるケースもまたかわいらしくて」

「もさもさのやつですか？」

「はいっあとひいらぎ小僧とか」

また始まった。

と、ゲオルグは長いため息をついた。

女性がはしゃぐとすぐに話が逸れる。そういえば、だの、噂で聞いたんだけど、だの。

「おい。ひいらぎ小僧は程々にして、さっさと次のメニューを決めよう」

「だってえ、ゲオルグ殿が口を開くのはチーズケーキばかりで、全然話が進まないんですもん」

「だからさっき、プリンと言っただろうが」

「そもそも、わたしチーズケーキって苦手なんですよね」

呟きにも似たミアキスの爆弾発言を、チーズケーキ命の男は聞き逃さなかった。

「な……なんだと？」

「チーズのもったり感がどうも合わないというか」

「ミアキス様ですか？ 私も実は、チーズ類はちょっと……」

女の子はやっぱり果物とかチョコよね、と意気投合するふたりを見比べながら、ゲオルグはわなわなと拳を震わせていた。

次の瞬間にはすっと立ち上がり、驚いた彼女らを恨めしい目つきで見下ろす。

「チーズケーキのどこが気に食わないんだ！」

両方の拳をぎゅっと握りしめ固く目を瞑って、今度はぶつぶつとお経のように呟き始めた。

「マスカルポーネ……そしてクリームチーズ、ふたつのチーズが優しく絡み合い、異なる食感を生み出すフォンダン・フロマージュ！ マスカルポーネチーズの濃厚な味わいが引き立つティラミス！ パルミジャーノ・レジャーノの塩気と旨みを生かしたタルト！ そしてクリームチーズとサワークリーム本来の味……絶妙な美味さの本家チーズケーキ！ どうだ、チーズはこんなにも素晴らしいデザートを提供してくれるんだぞ！」

スイーツを、特にチーズを愛する男の力説。

しかし、ふたりは耳を傾けるどころか、別の話題で盛り上がっていた。

「ベルナデットさんはヤシユナの温泉まんじゅう、食べました？」

「はい！ とつてもおいしかったです。 あんこと栗入りの2種類があるんですね」

「そうそう。 …… あ、サウロニクスの『洋菓子専門店・リュウバ』は？」

「残念ながら、まだ行った事がないんです」

「じゃあ一緒に行きましょう。 昔からひいきにしてるんですけど、あすこのシヨコラケーキは最高なんですよお」

「お前ら、人の話を聞け！」

さしもの彼も、女性ふたり（しかも結構強い）の結束を破ることはできなかった。

その上チーズケーキチーズケーキうるさいだのと言われる始末。

「今に見てろ……。 必ずレストランのメニューに入れてやる！」

固く決心しながら、また道具屋からチーズケーキを取り寄せる毎日が続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9711r/>

jumble+rumble!

2011年3月29日18時22分発行